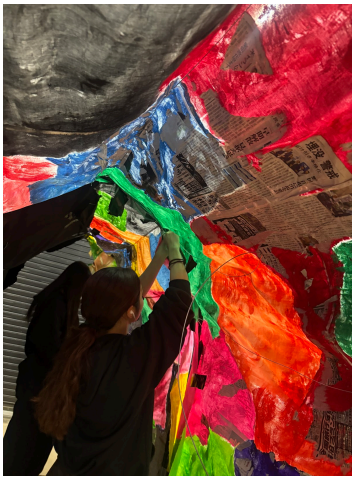
絵本を題材にした幼児対象の対話型劇場実践
「どったん！ばったん！トンネルパーティー！」を通して

九州大谷短期大学幼児教育学科2年
綾戸 羚太、有馬 花麗、河口 穂乃花、田中 明菜、
松田 さくら、松永 愛翔、松藤 美衣、村尾 絆圭、
村上 萌華

第1章 実践の概要と背景

1.1 実践企画の概要と目的

本企画は、絵本『へんしんトンネル』の世界観をもとに、「言葉の変化」と「身体表現」を結びつけた変身体験を目的として構成した。導入では、学生証を用いて大学生から小学生へと変身する場面を設定し、立場の変化によって言葉遣いやランドセルを身に付ける等身体の在り方が変わることを実感できるようにした。活動全体は主に三段階で展開し、まず学生が身体を変化させ子どもは言葉の変化を一緒に声に出し楽しむ子ども参加型のやりとりを行った。次に、実際に学生と子どもが一緒にトンネルをくぐり、音の連なりに合わせて身体も変化させる参加型の活動を行った。最後には「また明日もトンネルあるかな？」と問いかけ、ここでの体験をその場で完結させず、明日への期待や継続的な遊びへとつながる構成を意識した。保育の視点として、子どもの主体的な参加や想像の広がりを大切にした点に特徴がある。また、子どもたちが劇が始まる前からワクワクするような環境を整えるため、大きく、カラフルなトンネルを作成した点も大きな工夫点だと言える。写真は、そのトンネルの制作過程の一部である。



（松田さくら）

1.2 題材「へんしんトンネル」の特徴と教育的ねらい

題材である『へんしんトンネル』の特徴として、言葉遊びが中心で言葉と言葉のつながりやその言葉の中の音の変化を楽しむ構成となっています。またその言葉を何回も繰り返して発声するためそのリズムが楽しく子どもたちも予測しながら参加することができ声に出して楽しむことができます。ストーリーがシンプルなぶん変身する場面が面白く際立ち子どもたちも理解しやすい展開になっている。そして子どもたちが一緒にトンネルの中へ入り変身す

ることで不思議でワクワクする世界観に入り込みやすい題材である。
　このような特徴があることから、トンネルに入る際にはどのような言葉でトンネルに入るのか動きを真似したり子どもたちに問いかけ一緒に声に出してみるよう誘い「せーの！」などの言葉掛けで入ることで一緒に声に出して次の言葉への変化を楽しむことができるようなストーリーにしました。そのほかに客席から実際に子どもたちをステージ上にあげて一緒にあおむしやゴリラのお面を被りトンネルに入って変身して違う姿で登場する参加型を取り入れ、言葉だけではなく身体で表現する楽しさを感じることができるようにした。

（有馬花麗）

1.3 準備過程のチーム運営と役割分担

　準備過程では、変身トンネルがサイズも大きく、工程も多い製作物であったため、個々で別々の作業を進めるのではなく、全員で同じ作業に取り組むチーム運営を行った。役割分担は最低限にし、材料の準備から装飾、強度の確認までを一つずつ丁寧に進めた。作業中は「子どもたちが安全に楽しめるか」「くぐることで変身した気持ちになれるか」を共通の目的として話し合いながら進めることで、意見を共有し協力する力を高めることができた。
　これにより、一人ひとりが製作全体の流れや意図を理解しながら関わることができ、完成後の達成感もチーム全体で共有することができた。また、意見を出し合いながら進めたことで、子どもの立場に立って考える視点が深まり、安全面や表現面への配慮の重要性にも気づくことができた。この経験は、今後の保育活動において協働して準備を進める際にも生かしていきたい。

（村尾絆圭）（村上萌華）

第2章 企画・準備過程の詳細

2.1 遊びの展開と変身の流れの設計

　絵本『へんしんトンネル』は、トンネルを通ることで言葉や姿が変化するという、不思議でユーモアのある世界観が特徴である。本活動では、この「変身」という要素を遊びの中心に据え、子どもが自然に身体表現へと入り込めるよう展開を設計した。学生二人が会話をしながら散歩をする設定でステージに登場した。日常的な場面から始めることで、子どもが状況を理解しやすく自然に活動へ入り込めるようにした。散歩の途中で、布を被せたトンネルを見つけ、学生が興味を示しながら中をくぐる展開とした。「ちょっと通ってみよう」といった自然な会話のみで進めることで、トンネルの正体や役割について子ども自身が想像力を膨らませられるようにした。学生二人がトンネルをくぐった後、効果音をつけながら変身した姿でトンネルから出てくることで、場面に大きな変化を与え、子どもの注目や関心を集めた。変身後には「なんで変身したの？」「なんのトンネル？」といった会話のやりとりを取り入れ、不思議な出来事が起きたことを言葉で表現し共有する場面を設けた。これにより、子どもは出来事を受け止め整理しながら、「トンネルをくぐると変身する」という遊びのルールを自然に理解していった。また、問いかけを通して子どもが心の中で答えを考えることで、その後の遊びへの展開や意欲が高まる様子が見られた。馬の鳴き声「パカパカパカパカ」からカッパに変身した。次にコチョコチョからチョコレートに変身した。その次はアオムシから蝶々に変身した。その次はゴリラの鳴き声「ウホウホウホウホ」からフクロウの

鳴き声「ホウホウホウホウ」に変身した。このようにへんしんトンネルを通ることで、鳴き声から変身したり、動物の成長で変身した。
　子どもたちにただ見てもらうのだけでなく、一緒にへんしんトンネルを通ることで、実際に体験し変身後の動物になりきる体験ができたと思う。

（松永愛翔）

学生の変身については、当初トンネルをくぐればなにかに変身するという物語の趣旨を理解してもらうためだけのトンネルを通る動作だったので、言葉あそびは予定しておらず、学生証を探しに行くという物語の中で変身する予定でしたが、中間発表の際に先生方から色々なアドバイスと案をいただいて、学生証→小学生という変身案をいただきました。子どもたちは学生証というものを知らないと思い、大きな学生証を作って、「これがないと大学生って証明できないよー」というセリフで子どもたちにも大学生をわかりやすく物語の中で理解してもらうことができたと思います。
　子どもたちの変身は簡易的なもので済ませるためお面やマントを準備した。客席に降りて一緒にトンネルを通ってくれる人を探しに行くと、通りたいー！と子どもたち自ら立ってくれて、想定よりも多い子どもがステージに上がってくれた。想定では1人ずつだったが、2人ずつになってしまい、みんな困ったが、臨機応変な対応をすることができ、子どもたちもこちらに合わせて鳴き声を真似してくれたり、一緒に客席を回ってくれた。あおむしから蝶々になるという流れは、あおむしは成長したらなにになるっけー？という問いをして、子どもたちにはまだ難しそうだったが、身をもってあおむしは蝶々になるというのを体験してもらうことで、子どもたちの心にも残り、学びにもなったと思う。音楽に乗せて蝶々として客席を回り、楽しそうにしている姿を見て子どもたちと客席を回るというアイディアはとても良かったと感じた。あおむしから蝶々になるという流れは、今まで言葉あそびで変身していた分子どもからした少し違和感だったと思うので、そこをもう少し工夫して鳴き声は鳴き声で統一したり、他にも成長過程を表す生き物を付け加えたりする工夫があっても良かったと思った。だけど子どもたちも変身を楽しんで一緒にトンネルをくぐってくれて、ゴリラの真似をしたり、蝶々、フクロウとして客席を回ったりしてくれて想定通りの流れを作れて良かった。

（田中明菜）

2.2 トンネルの設計と舞台配置計画

　トンネルは、学生が劇の中で通過する際に、子どもと一緒に中を通ったり、トンネル内で衣装の着替えや待機を行ったりすることを想定し、複数人が同時に入っても余裕をもって動けるよう、広いスペースを確保した大きめの構造に設計した。内部では大人と子どもが並んで歩く場面もあるため、圧迫感を与えないようアーチ状にして高さを出し、安心して通れる空間づくりを意識した。また、活動中にトンネルが揺れたり崩れたりすることがないよう、骨組み部分を針金でしっかりと固定し、必要に応じて補強を行うことで安定性を高めた。固定部分は客席から見えない位置に配置し、子どもが触れてしまうことのないよう安全面にも十分配慮した。舞台配置については、大学生が劇の流れに沿ってスムーズに移動できるように配置し、工夫した。大学生が子どもと一緒にトンネルを通ることで、子どもが安心して劇に参加できるようにするとともに、観客にとっても場面のつながりが分かりやすい演出となるよう計画した。また、素早く着替えられるように事前に並べて準備しておいたり、中に待機している人が援助を行ったりし円滑に進むようにした。

(河口穂乃花)

本企画の準備段階では、子どもが安心して参加でき、大学生も落ち着いて劇を進められるよう、事前の計画と環境づくりを大切にした。まず、劇全体の流れを大学生同士で確認し、どの場面で子どもが関わるのか、どのような声掛けや援助が必要かを具体的に話し合った。その際、子どもの反応を想定しながら意見を出し合い、共通理解を持つことを意識した。年齢の異なる子どもが参加することを想定し、難しい言葉は使わず、繰り返しの言葉や分かりやすい動きを取り入れることで、子どもが内容を理解しやすい構成になるよう工夫した。

また、当日の進行がスムーズに行えるよう、大学生の動線や立ち位置、移動のタイミングについても事前に確認し、実際に動きながらリハーサルを行った。衣装や小道具は使用する順番に並べて準備し、誰がどの役割を担うのかを明確にすることで、慌てることなく対応できるようにした。さらに、子どもの反応によって展開が変わることも想定し、時間や進行に余裕を持たせた計画とした。想定外の出来事が起きた場合でも、大学生同士が声を掛け合い、その場の状況に応じて柔軟に対応できる体制を整えたことで、子どもも大人も安心して参加できる企画につなげることができた。

（綾戸羚太）（河口穂乃花）

第3章 表現活動の実際と専門的考察

3.1 身体表現としての「変身」の動きの工夫

劇中ではトンネルに入っていく動物にもたくさんの工夫を施した。馬は、子どもたちに恐怖を与えないよう、被り物という選択肢もあったが、かわいい着ぐるみを着て登場することにした。パカッパカッと言いながら変身するため、子どもたちが足音を馬から連想させられるか不安だったため、パカッパカッと言いながらステージの中心で1周回る動きを加えた。

かっぱは馬のパカッという足音から繋がってかっぱになるため、分かりやすくするために色々なことを工夫した。まず子どもたちはかっぱを実際に見たことがないため、お面をつくり、お皿も頭に乗せて作った。全身緑にするために手袋と服を緑にした。初めの方はトンネルからでてきて、セリフを話す予定だったが、子どもたちに楽しんでもらうために「かっぱなにさま？かっぱさま！」という曲にのせてトンネルから登場することにした。かっぱのお面が少し怖いこともあり、曲にのせて初めにダンスをすることで子どもたちに楽しく見てもらえたと思う。課題点はもっとかっぱとしての物語があっても良かったとも思った。

馬からかっぱになって、発展して子どもたちがかっぱという生き物についてどういう認識なのか、学びを深めるためのなにかなどしたらもっといい工夫になったかなと感じた。

蝶々については、言葉の繋がりではなく、あおむしから蝶になるという成長に関する言葉あそびで、小学生以下の子ども向けに作った劇としては難しかったと感じた。蝶の場面から客席の子どもたちを巻き込む演出を加え、観客参加型の劇にした。蝶々は子どもたちも普段から目にしたことがあり、親しみやすい生き物だと思うので、もっと表現方法を工夫すれば良かったかなと思った。動きとしては、トンネルから子どもと一緒に出て、歌に乗せて客席に舞うという演出にしたが、もっと学びや知識を深めるためにお花を用意したり、蜜を吸ったりする場面を作っても面白かったかなと思った。

フクロウはホー、ホーと鳴くのでこれは言葉あそびとして楽しかったと思うが、これも園児向けにするとフクロウは子どもにとってあまり親しみのない生き物で、お面も作ったが、表現するのが難しく、あまり工夫できてなかったと思った。フクロウはホーホーと鳴くという

のをもっと主張して、子どもたちに楽しんでもらえるかつわかりやすくするにはもっと表現に工夫を加えるべきだったと感じた。

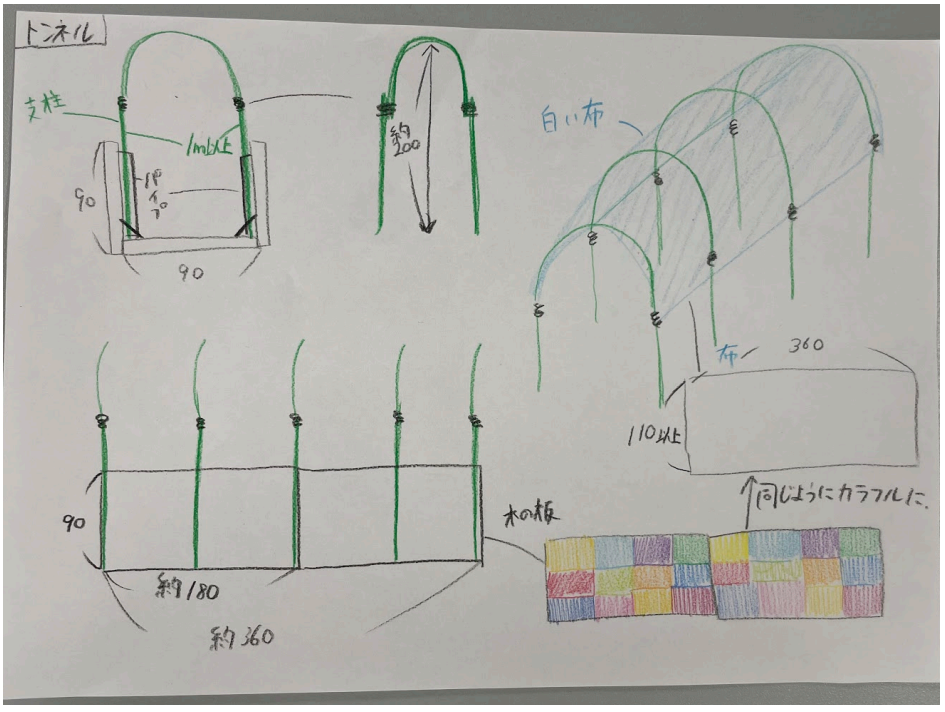
(田中明菜)

本活動では、変身前後の違いをはっきりと感じられるように構成し、声を出すことと身体表現を結びつけた関わりを行った。変身前には、馬やゴリラなど子どもにとって動きや声を想像しやすい存在を設定した。実際に活動が始まると、子どもたちは大きな声で鳴き声をまねしたり、身体を揺らしたりしながら全身を使って表現する姿が見られた。友だちの動きをまねたり、より大きな動きをしようとしたりする様子から、表現すること自体を楽しんでいる様子が感じられた。一方、変身後にかっぱやフクロウが登場すると、子どもたちの声の調子や身体の動きに変化が見られた。例えば、ゴリラからフクロウに変身する場面では、力強いドラミングの動きから、フクロウが空を飛ぶように手をなめらかに動かし羽のように見立てる等静かに動きが小さくなる姿があった。このような変身前後の対比によって、子どもは言葉や音の変化に合わせて、自分の身体の使い方を自然に切り替えていたと考えられる。また、声出しの工夫は、子どもの参加を促す上で大きな役割を果たしていた。繰り返しのある言葉は、子どもが真似しやすく、活動の中で次第に自分から声を出す姿につながっていった。中には、次にどんな言葉になるのかを予想しながら、少し早めに声を出す子どもも見られ、音の変化を楽しんでいる様子も感じられた。さらに、保育者が声の大きさや速さを変えることで、子どもは変身の場面をよりはっきりと意識していた。ゴリラが登場する場面では、トンネルに入る前は大きな声で、ゆっくりと言葉を繰り返しながらトンネルへ入っていき、トンネルの中から外へ出るにつれ声出しを加速し関わることで、子どもの動きや表情にも変化が生まれ、活動全体が一体感のあるものとなった。このように、本活動における変身前後の対比と声出しの工夫は、子どもが主体的に関わりながら、言葉と身体を結びつけて表現する経験を支えていた。遊びの中でのこうした体験は、子どもの想像力を表現する楽しさを育む上で重要な意味をもつといえる。

（松田さくら）

3.2 造形表現（トンネル・衣装）の制作と視覚的工夫

まずトンネルを制作するにあたって不思議なトンネルに見えるようにすること、予算内でどれだけ丈夫なトンネルを作るか、トンネルらしさを出すことを意識した。まず不思議なトンネルに見えるために、普段見るようなトンネルの色にするのではなく隣り合わせの色が同じにならないようにカラフルな色を使い、直線で区切っていくのではなく曲線を使っ



て不思議に見えるように工夫した。下の部分と上の部分で同じ模様にするのではなくバラバラの模様にする工夫もした。次に予算内で丈夫にするために設計図のように木の板はコの字にして下が広がらないようにした。また、支柱を木の板に直接くっつけるのではなくパイプを先に壁板につけて、その中に支柱を入れるようにした。支柱が強い力で中心に引っ張られていたが、パイプの中に入れておくことで、若干の余裕がある中で支柱が引っ張られていて良かったと思う。ですが、支柱とパイプがかなり強い力で引っ張られていたので壁板に穴を開けてテープだけではなくパイプと壁板を結束バンドで上下1箇所ずつ固定するようにした。そしてトンネルらしさを出すことについては、骨組みを組み立てた後布を被せてみると、支柱のある場所はへこまなかったが、支柱と支柱の間の2箇所がへこんでしまいトンネルらしさがなくなってしまっていたので、頂点と45度くらいの場所に針金を通すことにした。その針金に布をテープでとめていくことでそこまで大きく凹むことはなく、頂点は針金に乗せることができるのでより丸みを帯びたトンネルの形にすることができた。

　そのほかに、ステージ上はライトで照らされる為トンネルの中が透けて見えてしまうかもしれないとなり、トンネルの後ろ側には白ではなく黒の布を貼ることにした。

　次にかっぱのお面は頭のお皿の部分をどうするのか考えた。結果的にはお皿を完全には固定せずに動きがあるお面にすることにした。お皿の中心をお面とくっつけてしまうと前後の動きが出にくいが、少し前よりに付けることで前方に傾いたまま揺れるお面になった。また、お面が正面に真っ直ぐならずに顔の形に沿うような丸いお面になってしまったが、先生に相談すると横を向いたときにより顔の動きがわかるのでいいと思うよと教えていただき、実際に劇の動画を見てみると顔の向きや動きがわかりやすいように感じた。

(有馬花麗)

　企画における造形表現では、トンネルと衣装の制作を通して、視覚的に分かりやすく、子どもが興味を持って主体的に関われるような工夫がいろいろな所に取り入れられていた。特に、見た瞬間に「何だろう」「入ってみたい」と感じられるような造形を意識することで、物語への導入として重要な役割を果たしていたと考えられる。トンネルの制作においては、「不思議なトンネル」に見えることを重視し、普段子どもたちが目にするような単色や直線的な構造ではなく、カラフルな配色や曲線を多く用いた構成とした。隣り合う色が同じにならないように配色することで視覚的な変化を生み出し、自然と子どもの注意を引きつけるデザインとなっている。また、上部と下部で異なる模様を取り入れることで、見る位置や角度によって印象が変化し、トンネルを通る前後で気持ちが切り替わるような効果も生まれた。このように、トンネル自体が単なる通路ではなく、物語の世界へと入り込むための象徴的な装置として機能していた点が特徴的である。構造面では、トンネルらしい丸みのある形を保つために、骨組みの組み方や布の固定方法に工夫が見られた。支柱と支柱の間に針金を通し、その針金に布を固定することで、布の

たるみを抑え、全体に安定感のある丸みを帯びた形状を維持している。また、ステージ照明によって内部が透けて見えてしまうことを防ぐため、後方には黒い布を使用し、内部の様子が過度に見えないよう配慮されていた。こうした視覚的配慮は、演出上の不思議さや世界観を損なわないだけでなく、子どもが安心してトンネルを通ることができる環境づくりにもつながっている。衣装制作においても、それぞれが多くの工夫を加えて取り組んでおり、その中でもチョコレートの衣装については、大きさをどの程度にするか、またどのように固定するかを中心に試行錯誤が重ねられていた。客席から見た際に、後方の子どもや観客にも分かりやすく見えるよう距離感を意識しながらサイズを調整し、動いたときにも存在感が十分に伝わるよう工夫していた。また、視認性を高めるために身体全体を使った大きな動きを意識して演技を行うことで、衣装の特徴や役柄がより明確に伝わるようになっていた。これらの造形的・視覚的工夫により、トンネルと衣装はともに、子どもが安心して楽しめると同時に、物語の世界観を視覚的に分かりやすく支え、対話型劇場において重要な役割を果たしていた。

この文章から読み取れる場面は、子どもが観客として受け身になるのではなく、空間や登場人物と関わりながら物語に参加していく対話型劇場の上演場面である。

会場に入ると、まず目に入るのが色とりどりで曲線を多く用いた「不思議なトンネル」である。直線的で無機質な構造ではなく、丸みを帯びた形やリズムのある模様が施されているため、子どもたちは自然と足を止め、「これは何だろう」「入ってみたい」という気持ちを抱く。照明によって内部が完全には見えないよう工夫されており、少し不安を感じつつも、黒い布による配慮によって安心感が保たれている。そのため、子どもたちは友だちや保育者と声を掛け合いながら、期待を持ってトンネルをくぐっていく様子が想像できる。

トンネルを抜けることで、日常の空間から物語の世界へと気持ちが切り替わり、子どもたちの表情や姿勢にも変化が現れる。上部と下部で異なる模様があることで、くぐる前と後で見え方が変わり、「別の世界に来た」という感覚がより強まっている場面である。

その後、舞台上にはチョコレートをモチーフにした衣装を身にまとった演者が登場する。衣装は大きく分かりやすい形で作られており、後方の子どもにも一目で役柄が伝わる。演者は大きな動作や身体全体を使った表現で動き、衣装が揺れたり目立ったりすることで、子どもたちの視線を引きつける。子どもたちは笑ったり指をさしたりしながら、登場人物に親しみを持って反応している。

この場面全体を通して、トンネルや衣装は単なる舞台装置ではなく、子どもが安心して世界観に入り込み、想像を広げ、物語に参加するための重要なきっかけとなっている。造形表現と演技が結びつくことで、子どもたちの興味や感情が自然に引き出され、物語が立体的に体験できる場面が構成されていることが分かる。

（有馬花麗、綾戸羚太）

3.3 音・音楽表現の活用と変身の連動

今回の活動では、変身トンネルを用いた遊びの中で音楽表現を取り入れ、変身の場面と連動させることを意識して取り組んだ。トンネルをくぐるという動作に「音」を加えることで、子どもたちがより具体的に変身をイメージし、期待感を持って活動に参加できるようにすることをねらいとした。

まず、トンネルから出てくる登場人物に合わせて音楽をつける工夫を行った。登場人物のイメージに合った音楽を使用することで、子どもたちは音を聞いた瞬間に「どんなものが出てくるのか」「どんな存在に変身するのか」を想像することができていた。明るく元気な登場人物の時には軽快で楽しい音楽を流し、不思議な存在や変身後の姿を表現する場面では、

少し低くゆったりとした不思議な音を用いた。このように音楽の雰囲気を変えることで、子どもたちは自然と気持ちを切り替えながらトンネルをくぐる姿が見られた。

また、変身する瞬間には毎回同じ音を使用し、「この音が鳴ったら変身する」という共通の合図になるようにした。同じ音を繰り返し用いることで、子どもたちは音と変身を結びつけて理解しやすくなり、音が鳴ると同時に表情や動きを変える姿が多く見られた。トンネルの中で音が鳴ると、歩き方を変えたり、変身後の役になりきった動きをしたりするなど、それぞれが自分なりの表現を楽しんでいた。

さらに、トンネルから出てくる場面では「ジャジャーン」という効果音を取り入れ、登場の瞬間が分かりやすくなるようメリハリをつけた。この効果音によって、見ている子どもたちにも「今、出てきた」ということが明確に伝わり、自然と注目が集まるようになった。その結果、出てきた子どもに対して拍手をしたり、「〇〇だ！」と声を上げたりする姿が見られ、活動全体に一体感が生まれていた。

音楽表現を取り入れたことで、普段は表現遊びに消極的な子どもも、音に後押しされるようにして体を動かしたり、役になりきったりする姿が見られた。音があることで、何をすればよいかが分かりやすくなり、安心して活動に参加できる環境が整ったと感じる。また、同じ音を繰り返し使用することで活動の流れが分かりやすくなり、次に何が起こるのかを見通しを持って理解できるようになっていた。

この活動を通して、音楽表現は子どもの想像力や表現力を引き出すだけでなく、活動への意欲を高めたり、場面の切り替えを分かりやすくしたりする大切な役割を持っていることを学んだ。今後の保育においても、音やリズムを効果的に取り入れながら、子ども一人ひとりが安心して自己表現を楽しめる環境づくりを大切にしていきたい。

さらに、音楽や効果音を用いたことで、順番を待っている子どもたちの姿にも変化が見られた。これまでは待ち時間に集中が途切れてしまう様子も見られていたが、音が鳴ることで次の展開を予測できるようになり、「次はどんな音かな」「誰が出てくるのかな」と期待しながら待つ姿が多く見られた。音楽が活動全体の流れをつくる役割を果たし、子どもたちが最後まで意欲的に参加できる環境づくりにつながっていたと感じる。

また、友だちが変身してトンネルから出てくる様子を見る中で、子ども同士の関わりも広がっていった。出てきた友だちに対して拍手をしたり、「かっこいいね」「〇〇に変身したね」と声をかけたりする姿が見られ、表現を共有する楽しさを感じている様子がうかがえた。自分だけでなく、友だちの変身や表現にも関心を持つことで、活動全体がより盛り上がっていったように思う。

特に印象的だったのは、同じ音や同じ場面を共有していても、子ども一人ひとりの表現の仕方が異なっていたことである。同じ変身の音が鳴っても、大きく体を動かして表現する子どももいれば、表情や歩き方で静かに変身を表す子どももおり、それぞれの個性がよく表れていた。音楽表現は、表現の仕方を一つに限定するのではなく、子ども自身の発想や感じ方を尊重しながら引き出す力を持っていることを改めて実感した。

また、変身トンネルという空間と音楽が組み合わさることで、気持ちの切り替えがしやすくなっていた点も大きな学びであった。トンネルに入る前、トンネルの中、出てきた後と場面ごとに音が変化することで、子どもたちは自然とその世界観に入り込み、変身することを楽しんでいた。音が場面の区切りとなり、活動にリズムを生み出していたように感じる。

今回の活動を振り返り、音楽表現を取り入れる際には、ただ音を流すだけでなく、「どの場面で」「どのような音を」「どのような意図で使うのか」を明確にすることが大切であると学んだ。音と動き、空間が一体となることで、子どもたちの表現はより豊かになり、活動への意欲も高まると感じた。

今後の保育においても、今回の経験を生かし、音やリズムを効果的に取り入れ、しっかりと周りを見ながら子ども一人ひとりが安心して自分なりの表現を楽しめる活動を計画していきたい。そして、子どもたちが想像の世界を十分に楽しみ、友だちと気持ちを共有できるような保育を実践していきたい。

　また、今回の活動を通して、音楽表現は年齢や表現の得意・不得意に関わらず、すべての子どもが同じ場を共有しやすくする手立てであることを感じた。言葉による説明だけでは伝わりにくい場面でも、音が合図となることで子どもたちは自然と動き出し、活動に入り込んでいた。今後も、子どもたちの姿や反応を丁寧に受け止めながら、音を生かした保育の工夫を重ねていきたい。

（村上萌華）

3.4 ことば・対話の展開と子どもの想像力

　絵本『へんしんトンネル』は、トンネルを通ることで言葉や姿が変化するという独特な設定により、子どもの言葉への関心や想像力を自然に引き出す作品である。本活動では、この絵本の世界観をもとに、遊びの中でことばや対話が広がる展開を大切にした。導入では、学生同士の会話や変身後のやりとりを通して、不思議な出来事が起こったことを印象づけた。「なんで変身したの？」「なんのトンネルだと思う？」といった問いかけは、子どもに考えるきっかけを与え、自分なりの言葉で答えようとする姿につながった。また、正解を求めるのではなく、子どもの発言を受け止めることで、自由に想像し発言できる雰囲気をつくることを意識した。友達との変身や表現を見る中で、「次は〇〇になりたい」「こんな変身もありそう」と、子ども同士の対話も生まれ、言葉を介してイメージを共有する姿が見られた。こうしたやりとりを重ねることで、想像したことがさらに膨らみ、遊びに発展していった。さらに、学生が子どもの発言を繰り返したり言葉を補ったりすることで、子どもは自分の思いが受け止められていると感じ、安心して言葉を発することができていた。このような関わりは、言葉を得る力や表現力の向上にもつながると感じた。

（松永愛翔）

　この絵本は、ことばがトンネルを通ることで音が変化していくという特徴があり、演じることでその面白さをより感じることができた。
　劇をつくる過程では、どのように言えば変身したことが伝わるかや言葉が変わるまでの間や繰り返しをどう表現するかをグループで話し合った。これは単にセリフを覚えて言うだけではなく、ことばの響きを意識しながら対話をする時間だったと感じた。
　また、『へんしんトンネル』は、はっきりとした説明がないからこそ、聞く相手の想像力に委ねられている絵本であると思うので劇にする際も、「こうでなければならない」という決まりはなく、それぞれが考えたイメージを動きや声でカッパやゴリラを表現した。その多様さから、子どもが観た場合も、一人ひとり異なる想像を膨らませることができると感じた。繰り返されることばの変化は、子どもが自然に参加したくなるような声掛けを行い、子どもも自然と声が出るように意識した。劇を見ながら声に出して真似をしたり、次の変身を予想したりすることで、大人と子ども、子ども同士の間に対話ができ、ことばを「一緒に楽しむ」ことが、想像力を引き出す関わりになると学んだ。
　今回の活動を通して、絵本の劇は、ことば・対話・想像力が一体となって広がる表現活動であると感じた。今後、子どもと関わる際にも、正解を求めるのではなく、子どもの発想やことばを受け止めながら、一緒に楽しむ姿勢を大切にしたい。

（松藤美衣）

第4章 子どもの姿と学びの考察

4.1 子ども参加型変身活動（アオムシ→蝶々など）の考察

子ども参加型では、 子ども一人と学生がへんしんトンネルに入り、他の子どもは客席から劇を見ながら、何に変身するのかを想像する形で行った。アオムシから蝶々へと変身する場面を中心に、身体表現や想像力を楽しむことをねらいとした活動である。トンネルに入った子どもは、学生と一緒に表現することで安心感を持ちやすく、役になりきって動こうとする姿が見られた。特にアオムシの場面では、手をアオムシのように動かしたり、ゆっくりと動いたりするなど、アオムシの姿を意識した表現が見られた。トンネルをくぐり蝶々になると、腕を大きく広げて羽ばたく動きを楽しむ様子もあり、変身すること自体を喜びとして感じている様子が見られた。このように、学生と一対一で関わることで、表現に自信を持ちやすく、想像の世界に入り込みやすい点は本活動の良かった点である。また、客席で劇を見る子どもは直接トンネルに入る体験はできないものの、変身後の姿を見て「何に変身したのか」を考えたり、予想したりする姿が見られた。友だち同士で意見を交わす場面もあり、見る立場であっても想像力を働かせながら活動に参加している様子が分かった。このことから、参加の形は異なっていても、それぞれが活動に関わることができていた点は良かったと思う。さらに、ゴリラの声出しの場面では、客席の子どもも声で参加することを促した。最初は恥ずかしさから声が小さい子や、周囲の様子を見てためらう子も見られたが、友だちや保育者の声につられて、徐々に声を出そうとする姿も見られた。全員が同じように積極的に参加したわけではないが、それぞれのペースで関わろうとする姿が見られたことから、集団の雰囲気が子どもの表現を後押しする効果があったと感じられた。一方で課題として、トンネルに入る子どもと客席で見る子どもの間で、体験の深さに差が生じやすい点が挙げられる。特に客席の子どもは、想像が難しくなると受け身になりやすく、活動への関わりが弱まる場面も見られた。また、声出しの活動では、声を出すことに抵抗を感じる子もおり、全員が安心して参加できていないところも感じられた。客席の子どもにも簡単な動きやジェスチャー、問いかけを取り入れることで、見るだけで終わらず、より主体的に参加できる活動へと工夫していく必要があると考えられる。子ども一人ひとりの感じ方や表現の仕方を大切にしながら、誰もが安心して関われる変身活動を目指していきたい。

（河口穂乃花）

4.2 トンネルの非日常的環境が子どもの表現にもたらす効果

本企画では、こども劇場の活動として「へんしんトンネル」を用いた表現遊びを行った。変身トンネルは、普段の保育室にはない大きな構造物であり、布や装飾によって囲まれた空間をくぐることで、子どもが“何かに変身する”ことをイメージできる環境構成となっていた。活動前から子どもたちはトンネルに強い興味を示し、「通ったら何になるの？」と期待感をもって参加する姿が見られた。このことから、へんしんトンネルは活動への意欲を高める導入として大きな役割を果たしていたと言える。

実際では、子どもたちはトンネルをくぐることで、ゴリラやフクロウなどの動物になりきった表現を行っていた。特にゴリラを演じた子どもは、腕を大きく振りながら歩いたり、胸を張って声を出したりするなど、私が想像していた以上に身体全体を使って思いきり楽しそうに表現していた。その姿からは、恥ずかしさや戸惑いよりも、「なりきる楽しさ」が前面に表れており、表現すること自体を喜んでいる様子が見れた。。一方でフクロウを演じた子どもは、フクロウの特徴を意識した落ち着いた表現を行っていた。このように、同じ環境

の中でも、子ども一人ひとりが持つイメージや感じ方によって表現の仕方が異なり、多様な表現が生まれていた。

専門的に考察すると、変身トンネルが生み出す非日常的な環境は、子どもの心理面に大きな影響を与えていたと考えられる。トンネルの中は外の様子が見えにくく、周囲の視線を意識しにくい空間であるため、子どもは「うまくやらなければならない」「見られて恥ずかしい」といった不安から解放されやすいと考える。その結果、ゴリラのように大胆で力強い表現も、抵抗感なく行うことができていたと考えられる。このような環境は、子どもが自分の心の中にあるイメージを安心して外に出すことを可能にし、表現活動への主体的な参加を促していた。

また、トンネルを「通る」という身体を使った動作そのものが、表現活動への自然な導入となっていた所も重要だと思う。身体を動かしながら空間を通過する経験は、子どもの身体感覚を刺激し、その後の動きや表現へとつながりやすい。ゴリラを演じた子どもが大きな動きを自然に行えていたことや、フクロウを演じた子どもが静かな動きを意識できていたことは、身体を通した経験が表現に反映されていたことを示している。

環境構成の視点から見ると、変身トンネルは保育者が細かく指示を出さなくても、子どもが自ら考え、表現できる「語りかける環境」となっていたといえる。トンネルを通るだけで「変身する」という意味が自然に伝わり、子ども自身が「何になろうか」「どう動こうか」と主体的に考える姿が見られた。これは、環境が子どもの行動を引き出し、学びや表現を支える重要な要素であることを示している。

子どもとの関わりにおいては、保育者が表現の良し悪しを評価するのではなく、「ゴリラみたいに強そうだね」「フクロウみたいに静かだね」と子どもの表現を受け止め、言葉にして返す関わりを大切にした。その結果、子どもは自分の表現を認められたと感じ、繰り返しトンネルを通って表現しようとする姿が見られた。このように、環境構成と保育者の受容的な関わりが合わさることで、子どもの表現意欲や主体性がさらに高まっていた。

以上のことから、変身トンネルという非日常的な環境は、子どもの想像力や身体表現を引き出し、安心して自己表現ができる場として大きな効果をもたらしていたといえる。本実践を通して、表現活動においては活動内容だけでなく、環境の工夫や子どもとの関わりが表現の深まりに直結することを学んだ。今後の保育実践においても、子どもが「やってみたい」「なりきりたい」と感じられる環境構成を意識していきたい。

（村尾絆圭）

第5章 まとめ（総合的評価と省察）

5.1 省察と今後の課題(綾戸 羚太)

今回の対話型劇場の実践では、子どもたちが物語の中に自然に参加できるよう、「へんしんトンネル」を中心に多くの関わりの場面を取り入れた。特に、同じ言葉を繰り返し唱えながらトンネルを通る演出は、子どもたちが声を出して参加しやすく、物語の世界に入り込む大きなきっかけとなった。また、「何に変身すると思う？」「どうなるのかな？」といった問いかけを行うことで、子どもたちは次の展開を想像し、自分なりの考えを持ちながら物語に関わる姿が見られた。こうした関わりを通して、子どもたちの想像力や考える力が引き出され、主体的な参加へとつながっていたと感じる。年齢の異なる子どもたちも無理なく参加でき、会場全体に一体感が生まれた点は本実践の大きな成果であるといえる。本実践を通して、子どもたちは「見る側」ではなく「参加する側」として劇場体験を楽しんでおり、声を出したり、問いかけに応えたりする中で、自分も物語の一部であるという実感を持っていた。繰り返しの言葉や分かりやすい設定が子どもたちに安心感を与え、表現することへの意欲を高めていたと考えられる。一方で、声を出すことに積極的な子どもが目立つ場面もあ

り、全ての子どもが同じ形で参加できていたとは言い切れない点が課題として挙げられる。
　今後は、座ったまま手を挙げる、身振りや動作で表現する、動物の動きを真似するなど、言葉以外の参加方法をより意識的に取り入れていきたい。身体を使った表現を取り入れることで、言葉の発達だけでなく身体的な発達にもつながり、より多様な子どもたちが安心して関われる対話型劇場の実践を目指していきたい。

5.2 省察と今後の課題(有馬花麗)

　今回の対話型劇場の実践で子どもたちが参加できる場面、関わる場面を多くストーリーに組み込んだとこは良かったと思う。「へんしんトンネル」には同じ言葉を繰り返し唱えることで何かの言葉にへんしんするという特徴があるので、同じ言葉を子どもたちと一緒に大きな声で唱えながらトンネルに入っていく場面では子どもたちもその場で参加することができるので参加しやすく声にすることで自分を表現しやすくなったり自分は参加している！という実感を持てたり会場の一体感が生まれるという利点がある。さらに年齢の異なる様々な子どもたちが参加できる。また、一緒に声に出して言ってみる以外にも「何に変身すると思う？」「どーなるのかな？」などの問いかけを行うことで次に何に変身するのか子どもたちが自分で考える瞬間や主体的な関わりにつながり考える力も育っていくと考えられる。一方で今後の課題として声を出すことに抵抗がある子どもでも参加しやすい言葉掛け等を取り入れることも一つの手段として使うのも良かったと思う。例えばその場に座ったまま手を上げてもらったり動物たちの動きの真似を一緒にしてみたりすることができたと思う。その場で一緒に動物の真似をして身体で参加することで言葉の発達だけでなく身体の発達にもつながると思った。場所を移動しなくても様々な参加する形を提供したり発達につながるような言葉掛けやストーリーを取り入れることができるよう今後頑張っていきたい。

5.3 省察と今後の課題(河口 穂乃花)

　『変身トンネル』を用いた表現活動を通して、子どもが想像し、身体で表現し、他者と関わりながら世界を広げていく姿を大切にした。企画段階では、「ことばと身体の連動」を軸に、トンネルをくぐるという単純な動作に“変身”という物語性を持たせることで、子どもが自然に表現活動へ参加できる環境づくりを目指した。準備過程では、トンネルの大きさや素材、安全面への配慮、舞台配置や音楽との連動など、多角的な視点から検討を重ね、表現を支える環境構成の重要性を実感した。実践では、動物や昆虫などのイメージをもとに、身体の動かし方や音、ことばを組み合わせることで、変身前後の違いが明確に伝わる表現となった。特に、子ども一人が実際にトンネルをくぐり、観客の子どもたちが「何に変身するのか」を想像しながら参加する構成は、見る側も表現の一部となる活動であった。子どもたちは、問いかけや効果音に反応しながら、自分なりのイメージを膨らませ、期待や驚きをもって劇に関わっていた。一方で、表現の意図が十分に伝わらない場面や、テンポ調整の難しさなどの課題も見られた。しかし、これらは子どもの反応を受けて柔軟に表現を変える必要性や学生の関わり方の工夫につながる学びであった。今回の実践を通して、表現活動は完成度の高さよりも、子どもが安心して参加し、自分の想像を表現できる過程が重要であると再認識した。
　今後は、子どもの発想をより引き出す問いかけや、子ども同士が表現を共有できる展開を取り入れ、さらに主体的な表現活動へと発展させていきたい。

5.4 省察と今後の課題(田中 明菜)

今回の「へんしんトンネル」の劇は子どもたちに問いかけをしたり、それに対して劇の中で会話したりと子どもたちにも参加して成り立つような物語にした。子どもは少なかったが、

客席に問いかけをすると子どもの素直な意見が返ってきて、予想外の返答がきたり、難しい問いかけには返答がなかったりと、子どもの年齢に添っているか顕著にわかる劇にはなってしまったが、参加型の劇としても見ているだけの劇としても楽しくできたと思います。トンネルをくぐるシーンでは毎回みんなで呪文のように言葉を唱えて変身するという形だったので、消極的な子であまり大きな声で応えたくても応えきれない子でもみんなで唱えることでどんな子でも声を出して参加できるところが今回の劇での良かったポイントだと思いました。
そしてトンネルを通ったら変身して登場するという流れを何度も繰り返すことによって、子どもたちも流れを覚えて、次は何が出てくるのかな？と想像力を働かせたり、ワクワクして劇を鑑賞してくれていたのではないかなと思いました。歌や踊りを入れていたことで子どもたちも楽しく一緒に歌を歌ったり踊ったりして楽しんでくれていたように感じました。
今後の課題は、言葉遊びから急に蝶々の成長になったり、子どもからしたらあまり結びつきがない流れで少し違和感を感じた部分もあったと思うし、問いかけの部分ももっと強調して、客席との会話をメインにして子供たちの学びをもっと深められたら良かったなと思いました。

5.5 省察と今後の課題(松田さくら）

本活動は、絵本『へんしんトンネル』の世界観を活かし、言葉の変化と身体表現を結びつけた遊びを通して、子どもが主体的に参加できる構成となっていた点が評価できる。導入から展開、そして活動後の問いかけに至るまで、一連の流れに連続性があり、子どもが安心して活動に入り込み、想像を広げていく姿が見られた。特に、声出しをきっかけに変身が起こる構成は、年齢の低い子どもでも理解しやすく、自然な参加につながっていた。省察としては、子ども一人ひとりの表現の違いを十分に拾いきれなかった場面もあった。声や動きを大きく表現する子どもが中心となり、恥ずかしさや不安から控えめに参加する子どもへの関わり方については、今後の課題として考えられる。また、変身の種類や回数が多くなることで、活動のテンポが速くなり、子どもが一つ一つの変化を十分に味わう時間が短くなったことも考えられる。今後は、子ども一人ひとりの表現を認める言葉掛けを取り入れたり、少人数での活動にするなど、子どもの姿に応じた柔軟な展開を工夫していきたい。本活動を通して得られた、言葉・声・身体が結びつく遊びの展開の可能性を、今後の保育実践に活かしていきたい。

5.6 省察と今後の課題（松永愛翔）

絵本『へんしんトンネル』の世界観をもとに、読み聞かせを行わず、学生同士のやりとりや動きを中心とした導入から表現活動へと展開した。その結果、子どもたちはトンネルを「変身が起こる不思議な場所」として捉え、強い興味や期待感をもって活動に参加していた。変身後の動きや表現では、子ども一人ひとりが思い描いたイメージを身体で表そうとする姿が見られ、友だちの表現に刺激を受けながら遊びを広げていく様子が印象的であった。また、変身という出来事に驚きや楽しさを感じている様子が見られた一方で、その世界観を十分に理解しきれないまま活動に入ってしまった子どももいたように感じる。導入の段階で、もう少し子どもが状況を整理できる時間や言葉かけが必要だったと反省している。さらに、トンネルや衣装といった環境構成についても、完成したものを提示する形となり、子ども自身が関わる機会が少なかった点が課題として挙げられる。今後は、子どもの反応をより丁寧に読み取り、一人ひとりのペースや思いを尊重した言葉かけや援助を心がけたい。ま

た、環境構成や導入方法を工夫して、子どもが主体的に関われる表現活動を実践していくことが、今後の課題であると考える。
　今回の実践を通して、活動を計画するだけでなく、その場での子どもの姿に応じて関わりを調整する力を強く感じた。他者の実践や助言にも目を向け、表現活動の引き出しを増やしていくことで、より柔軟な保育実践につなげていきたい。

5.7 省察と今後の課題(松藤 美衣)

　今回、『へんしんトンネル』を劇として表現する経験を通して、絵本は読み聞かせだけで完結するものではなく、演じたり対話したりすることで、ことばの学びがより深まることに気づいた。特に、ことばの音やリズムに注目することで、意味だけでなく「響き」を楽しむ関わりが重要であると感じた。

また、劇づくりの過程では、グループ同士で意見を出し合いながらどのように表現をするか、繰り返す言葉の速さなどを決めていったが、その中で自分は「分かりやすさ」を優先しすぎていたことにも気づいた。子どもに伝えることを意識するあまり、表現を限定してしまい、想像を狭めてしまう可能性があると思った。『へんしんトンネル』の魅力は、あえて説明しすぎないところにあり、子どもが自由に想像できる余白を大切にする必要があると学んだ。

　今後の課題としては、子どもの反応やことばを受け止めながら、柔軟に関わる力を身につけたい。劇や読み聞かせの場では、あらかじめ決めた進行にこだわるのではなく、子どものつぶやきや予想を対話として広げていく姿勢が求められると感じた。

また、ことばの変化を楽しむ活動を、年齢や発達段階に応じて工夫することも課題であると感じた。どの部分を強調し、どこで間を取るのかを意識しながら、子ども一人ひとりが参加しやすい環境をつくる力を高めていきたい。今回の経験を生かし、絵本を通してことばと想像力が豊かに育つ関わりを実践していくことが、今後の目標である。

5.8 省察と今後の課題(村尾 絆圭)

　今回のこども劇場における変身トンネルの実践を通して、非日常的な環境構成が子どもの表現意欲を大きく引き出すことを実感した。トンネルという空間を通ることで、子どもたちは自然に「変身する」というイメージを持ち、ゴリラやフクロウになりきって表現する姿が多く見られた。特にゴリラを演じた子どもが、腕を大きく振り、声を出しながら全身で表現していた姿からは、活動を心から楽しんでいる様子が伝わってきた。全体を通して、表現に消極的な子どもは見られず、どの子どもも自分なりの表現を行っていた点は、本実践の成果だったと思う。
　省察として、子どもが主体的に表現できた要因は、活動内容だけでなく、環境構成と保育者の関わりが適切であったことにあると考える。変身トンネルは、くぐるだけで役になりきれる構造で、言葉による説明や指示を最小限に抑えても、子どもが自ら考えて動ける環境だった。また、保育者が表現の正解を求めるのではなく、子どもの動きや声をそのまま受け止め、肯定的に関わったことで、安心して表現できる雰囲気が生まれていた。このような関わりが、子ども一人ひとりの表現を引き出す土台となっていたと思う。

一方で今後の課題としては、活動をさらに発展させる工夫が挙げられる。今回は動物への変身を中心とした表現であったが、子どもの表現意欲が高かったからこそ、場面設定や物語性を加えることで、より深い表現へとつなげることができたのではないかと考えられる。例えば、「森の中を探検する」「夜の世界に行く」などの簡単なストーリーを取り入れることで、表現の幅や継続性が広がる可能性があると思う。また、子ども同士の関わりをさらに引き出す点も課題である。個々の表現は十分に見られたが、友だちの表現を受けて動きを変えたり、一緒に表現を作り上げたりするような展開を意図的に設けることで、集団ならではの表現活動へと発展させることができると考えられる。今回の実践で得た学びを今後の保育に生かし、環境構成と関わりの工夫を重ねながら、子どもの表現がさらに豊かに広がる活動を実践していきたい。

5.9 省察と今後の課題（村上萌華）

今回の変身トンネルの製作では、全員で同じ作業に取り組みながら準備を進めたことで、共通の目的を持って活動することの大切さを実感した。サイズが大きく工程も多い製作物であったため、個々で作業を分けるのではなく、話し合いを重ねながら一つひとつの工程を丁寧に進めていった。子どもたちが安全に楽しめるか、くぐることで変身した気持ちになれるかを意識しながら取り組んだことで、一人ひとりが製作の意図を理解し、責任を持って関わることができた。また、意見を出し合いながら進める中で、自分とは異なる考え方や視点に気づくことができ、協力して一つの物を作り上げる達成感を味わうことができた。

さらに、活動の中では音楽の時間にピアノを担当し、変身トンネルをくぐる場面に合わせた伴奏を行った。子どもたちの動きや表情を見ながら、音の強さやテンポを工夫することで、活動への興味や楽しさを高めることができたと感じている。音楽が加わることで、子どもたちがよりイメージを膨らませ、変身する世界観を楽しんでいる様子が見られた点は大きな学びであった。一方で、製作と音楽の両方に関わったことで、準備や確認に十分な時間を取ることの難しさも感じた。今後は事前の計画をより丁寧に立て、役割や流れを明確にしながら、子どもの姿に応じた柔軟な関わりができるようにしていきたい。また、音楽表現と製作活動を結び付け、より一体感のある保育を実践していくことを今後の課題としたい。